

上野の杜の 波瀾 万丈

第十二回

日本美術の保護 前篇

吉田千鶴子

薬師寺の国宝月光菩薩像事件をめぐり、文化財専門審議会専門委員として、また古美術を大切に思う一国民の立場から警鐘を鳴らした上野直昭学長の真意とは。

激怒する学長

上野直昭は戦時下の文部省による東京美術学校（美校）改革断行（本誌二〇号参照）により同校校長となり、一九四九（昭和二十四）年の東京藝術大学（藝大）発足とともに学長に就任し、藝大草創期の運営に大きな力を発揮した人だ。美学・美術史学者であり、潔癖にして冷静沈着、指導者の資質に富む人格者と目されていた。この人が在任中に一度だけ（管見の限りだが）怒りに駆られてマスコミに抗議文を投じたことがあった。それは一九五二昭和二十七年十二月の『芸術新潮』に寄稿した長文の「文化財は保護されてゐるか——薬師寺月光菩薩の問題をめぐつて——」である。

国宝薬師寺薬師三尊の脇侍月光菩薩の美しさはよく知られているが、頸部に問題があり、一九五二年の吉野地震以後、頭部落下の危険が生じた。それを文化財保護委員会に属する技官が委員会に諮ることなく頸を切断し、頭部から

胴体まで通っていた心棒も切断してしまい、委員会にその報告もしなかった。文化財専門審議会専門委員の上野学長はそれを知って驚き、文化財保護法の現状変更に関する規定に違反する行為と見做し、専門委員としての責任上、また古美術を大切に思う一国民の立場から保護関係者に猛省を促そうと、痛烈な抗議文を公表したのであった。『東京芸術大学百年史』東京美術学校第三巻別巻『上野直昭日記』に全文を収録しておいたのでご参照いただきたい。抗議の結果はというと、この問題も一九四九年の法隆寺金堂壁画焼失のときと同様に、一部関係者の処罰をもって片付けられてしまったので、彼は専門委員を辞任した。

抗議の理由

京城帝国大学教授在任中の一九四〇（昭和十五年）年に国宝保存会委員となつて以来、上野直昭は帝室博物館顧問、正倉院評議会議員、国立博物館評議員、文化財専門審議会委員、そし

て短期間だが東京国立博物館長（藝大学長兼任）をつとめ、保護行政に深く関わつてきた。痛恨極まりない法隆寺金堂壁画焼失事件を契機に翌年には文化財保護法が制定され、それによって従来よりも厳正な保護がなされると思つていた矢先に月光菩薩事件が勃発したのであるから、彼が愕然としたのも無理はない。

人一倍強硬な姿勢をとつたのは、自分が明治期における古美術保護制度樹立の際のトップ官僚九鬼隆一の甥であり、九鬼の片腕であつた岡倉天心の後継者のポジションを占めている者としての矜持にもよるのだろう。また、折しも開国百年記念文化事業会の企画による『明治文化史』の第八巻美術編（一九五六年、洋々社）の主任として近代日本美術教育・行政史の執筆に取り組み、天心の業績の歴史的意義を再認識したときだったから、その後継者として取立て毅然たる姿勢を示す必要があると思つたのかもしれない。さらに、月光菩薩となると、上野学長にはクールに看過しえない特別の事情もあった。彼は東大助手時代に天心の講義を聴いて強い感銘を受けたことを自著『邂逅』（一九六九年、岩

波書店）に書いている。その講義は古美術と対面したときの感動そのものが伝わってくるようであつたといひ、

ある時又こんなことを言はれました。「諸君がまだ薬師寺を見たことがないとすれば、諸君は幸福だ、あの薬師三尊が与へてくれた、美しい色沢の第一印象は、私にはもう二度とくり返すことはできない」と。

と講義の一端を紹介している。満場をうならせた天心のこの言葉を胸に秘めて、彼は何十回も薬師寺を訪れ、薬師三尊に對面して嘆賞したという。美術に従事する者にとって美術品そのものを實際に見て感動することが一番大切であることを彼は天心に教えられたのだ。

そうした思い出のまつわる薬師三尊は彼にとつて格別尊いものであり、そのなかの月光菩薩にためらいもなく手が加えられたのであるから、一層怒りが強かつたのであろう。

文化財保護、特に保存修復の研究・教育について



2



3



4



1

1. 薬師寺薬師三尊像のうち月光菩薩像(薬師寺所蔵写真)
2. 上野直昭 3. 岡倉天心 4. 矢代幸雄(仁田三夫氏撮影)

上野学長はこのような人であったから、美術・工芸品の材料や技術、修復保存の研究の促進に熱心で、そのための「総合研究施設」設置の概算要求を一九五四(昭和二十九)年に出した。しかし認可されず、その種の研究は各科内部、あるいは教官個人の研究室で進める以外にない状態が続いた。一九六〇(昭和三十五)年になって、文化財保護委員会から委員長代理矢代幸雄を介して美術・工芸部修理技術者養成の特別要請前出百年史美術学部篇に収録)があった。矢代は長く母校の美術史教授をつとめ、本学の事情に通じていた人で、要請は修理技術者の減少・高齢化および近年の化学製品の使用などに対処するため、研究蓄積のある本学に高度な技術者養成教育を開始してほしいというものだった。これが効を奏してか、一九六三(昭和三十八)年の大学院修士課程設置の際に保存技術講座が開設され、さらに上野学長退官後、引き続き保存科学講座、日本画古典模写講座、油画技法材料講座などが開設され、文化財の調査と模写、保存修復の活動が活発化した。また、時とともに他機関、国外との研究協力も進展し始めた。そうした状況の下で、天心の昭和の申し子と呼ばれた平山郁夫学長の時代が到来し、その在任中の一九九五(平成七)年には先の「総合研究施設」構想が文化財研究所との提携というかたちで不完全ながらも実現し、大学院美術研究科文化財保存学専攻という包括的な組織が誕生した。天心が中尊寺金色堂修繕(次回に記す)によって修復事業に先鞭をつけてからすでに一世紀あまりが過ぎていた。(次号につづく)

(よしだ・ちづこ／美術学部教育資料編纂室講師)

次号予告

「日本美術の保護 後篇」 吉田千鶴子

文化財保護の始まりと岡倉天心およびその周辺の人々による古美術品の調査・保護・修復活動の概要を紹介する。